

## 横澤利昌 先生のご退職にあたって

大 江 宏

昨年（2010 年）の 11 月の初め、横澤先生と思いがけないところでばったり出会った。兼六公園の恒例の雪開いが始まった頃の金沢・兼六公園側の宿の食堂であった。お互い全く想定外の出会いだったのでびっくりしたのだった。でも聞けば横澤先生がその街におられるのは不思議ではなく、むしろ私のほうが滅多に行かない場所に学会出張で行っていたのであった。

横澤先生は、老舗（長寿命）企業の研究をライフワークのひとつとしておられる。加賀百万石の金沢、とりわけ尾張町は前田利家のころからの長寿企業が残る老舗の街である。横澤先生は、毎週 1 日を研究日に確保されて、その前後の時間を取って全国の老舗を自前で行脚されているとのこと。たまたま私の学会出張先と横澤先生の企業訪問先が重なったのだった。横澤先生の現場主義・実証主義・自前主義の研究姿勢に改めて感心させられた。

横澤先生と私は、経営学部への着任がご一緒である（1985 年、因みに小山良先生も）。横澤先生は富士短期大学（現 富士大学）から、私は日本経済短期大学（現 本学短期大学部）から、小山先生は一橋大学の助手から、3 人一緒にマーケティング分野の教員としてスタートしたのだった。当時の経営学部は、大学院経営学研究科の創設を担われた錚々たる顔ぶれの先生方がおられた。横澤先生は富士短大に勤務されながら、本研究科の博士後期課程において、古川栄一先生、山本安次郎先生という経営学研究で日本を代表する両先生のご指導を受けられた。そうしたバックグラウンド故か、横澤先生の御研究のスタンスは当初よりマーケティングという領域に止まらない、経営全体からの考察を強く意識された総合的なアプローチであったと思う。

横澤先生は、マーケティング領域でアイデンティティを見つけようとした私とは違って、より大きなスケールでマーケティングとビジネスを捉えようとしておられたとみている。そのような視点が発揮された早い時期の成果のひとつが「バルディーズ原則」（アメリカの環境 NGO が提唱した 10 項目の環境倫理原則による企業評価法）の日本版による「企業の社会貢献度」の共同調査活動（1991&92 年、『朝日ジャーナル』臨時増刊号に掲載）だったと思うし、そのころから力を注ぎ始めた広範なホスピタリティ・ビジネス研究であると思う。当時の衛藤藩吉学長の要請で、横澤先生、清水均先生（非常勤）と私の 3 人で、アメリカにおけるホスピタリティ・ビジネス教育の現地調査のために、ワシントン州立大学、ミシガン州立大学、コーネル大学などの大学を回った（1990 年 3 月）。横澤先生がホスピタリティ研究に本格的に取り組む重要な旅であったと思うが、私にとっても忘れられない思い出の旅行のひとつになっている。

ここ四半世紀は、実践経営学会を主な舞台に、老舗の研究を通じてビジネス・マネジメントの本質や持続可能性を探究されておられると考える。ご退職後も恐らく大幅に増える自由時間を老

舗研究に注がれ、これまでの御研究の集大成を世に問われるのではないかと期待している。

最後に、横澤先生は、周知のように、温厚で忍耐強く、かつ積極的・行動的なお人柄であり、驚くほどの豊かな人脈の持ち主でもある。実践経営学会の会長を務められたのもそうした人徳ゆえであろう。亜細亜大学の、というよりも日本の大学の研究・教育環境が大きく変わる時代を、変わらずに情熱的に学生教育にも当たってこられた。同僚として、心から御礼申し上げたい。これからも、ますますお元気で、多方面でのご活躍を祈念している。